

魔法鬮

泉鏡太郎

青空文庫

峰^{みね}は木^この葉^はの虹^{にじ}である、谷^{たに}は錦^{にしき}の淵^{ふち}である。……信濃^{しなの}の秋^{あき}の山^や
 深^{まふか}く、霜^{しも}に冴^さえた夕月^{ゆふづき}の色^{いろ}を、まあ、何^{なん}と言^いはう。……流^{ながれ}は
 銀鱗^{ぎんりん}の龍^{りゅう}である。

鮮^{あざやか}紅^{こう}と、朱鷺^{とぎ}と、桃^{もも}色^{いろ}と、薄^{うす}紅梅^{こうばい}と、丹^にと、朱^{しゆ}と、く
 すんだ樺^{かば}と、冴^さえた黄^きと、颯^{さつ}と點^{した}滴^{たつ}る濃^こい紅^{べに}と、紫^{むらさき}の霧^{きり}を山氣^{さんき}に
 漉^こして、玲瓏^{れいろう}として映^{うつ}る、窓^{まど}々^々は恰^{あた}も名^なにし負^おふ田^た毎^{ごと}の月^{つき}の
 やうな汽車^{きしや}の中^{なか}から、はじめ遠^{とほ}山^{やま}の雲^{くも}の薄^{うす}衣^{ぎぬ}の裾^{すそ}に、ちら／＼
 と白^{しろ}く、衝^つと冷^{つめた}く光^{ひか}つて走^{はし}り出^だした、其^その水^{みづ}の色^{いろ}を遙^{はるか}に望^{のぞ}んだ

とき、にしきふすまわ
時は、錦の衾を分けた仙宮の雪の兎と見た。

をばな しろ をのへ はるか がけ なび
尾花も白い。尾上に遙に、崖に靡いて、堤防に残り、稲束を

縫つて、莖も葉も亂れ亂れて其は蕎麥よりも赤いのに、穂は夢の

やうに白い幻にして然も、日の名残か、月影か、晷々と艶を

はな やま そで ふところ にしき おもかげ と ふぜい
放つて、山の袖に、懷に、錦に面影を留めた風情は、山嶽の

いろか おもひくた こひ かけはし お あをぞら くも なごり
色香に思を碎いて、戀の棧橋を落ちた蒼空の雲の餘波のやう

である。

そらす かぜ ひ をばな ちつ うご
空澄んで風のない日で、尾花は靜として動かなかつたのに。：

：

ごふん わか みづ かけ しゆ と やげん するぎん まろ
胡粉に分れた水の影は、朱を研ぐ薬研に水銀の轉ぶが如く、

つ なが
衝と流れて、すらくと絲を曳くのであつた。

汽車の進むに連れて、水の畝るのが知れた。……濃き薄き、も

みぢの中を、霧の隙を、次第に月の光が添つて、雲に吸はるゝが

ごと、眞蒼な空の下に常磐木の碧きがあれば、其處に、すつと

浮立つて、音もなく玉散す。

窓もやゝ黄昏れて、村里の柿の實も軽くぱら／＼と紅の林に

紛れて、さま／＼のものゝの緑も黄色に、藁屋根の樺なるも赤い

草に影が沈む、底澄む霧に艶を増して、露もこぼさず、霜も置か

ず、紅も笹色の粧を凝して、月光に溶けて二葉三葉、たゞ

紅の點滴る如く、峯を落ちつつ、淵にも沈まず翻る。

散る、風なくして散る其もみぢ葉の影の消ゆるのは、棚田、山

田、小田の彼方此方、砧の布のなごりを惜んで徜徉ふ状に、疊ま

れもせず、靡なびきも果はてないで、力ちからなげに、すらくと末すゑ廣ひろがり

に細ほそくイはずむ夕ゆふの煙けむりの中なかである。……煙けむりの遠とほいのは人ひとかと思みゆる、

山やまの魂たましひかと思みゆる、峰みねの妾おんなかと思みゆる、狩かり暮くらし夕ゆふ霧ぎりに薄うすく

成なり行ゆく、里さとの美た女をの影かげかとも視ながめらるゝ。

水みづある上うへには、横よこに渡わたつて橋はしとなり、崖がけなす隈くまには、草くさを潜くぐつ

て路みちとなり、家いえある軒のきには、斜なめに繞めぐつて暮くれ行く秋あきの思おもひと成なる。

煙けむりは静しづかに、燃もゆる火ひの火ほ先さきも宿やどさぬ。が、南なん天てんの實みの溢こぼれた

やうに、ちらくくと其その底そこに映うつるのは、雲くもの茜あかねが、峰みね裏うらに夕ゆふ日ひ

の影かげを投なげたのである。

此この紅こうぎ玉よくに入いり亂みだれて、小を草ぐさに散ちつた眞しん珠じゆの數かずは、次しだ等だ

々々照い増くる、月つきの田た毎ごとの影かげであつた。

やがて、つき月の世界と成れば、野に、はた畑に、やまふところ山懐に、みね峰の裾
はるかすみに、遙に炭を焼く、それは雲に紛ふ、まがはた遠く筑摩川を挾んだ、
りやうがん兩岸に、すらくくと立昇るそれ等の煙は、まんざん満山の冷き虹
にしきうらの錦の裏に、擬つて霜の階と成らう。凍てて水すゐしやう晶の圓き柱と
な成らう。……

にしきば錦葉の蓑を着て、そきぎ其の階、そのはしら其の柱を攀ぢて、やまく山々、たに谷
ひめ々の、姫は、じやうらふ上藪は、うつく美しき鳥と成つて、げつきうでん月宮殿に遊ぶ
 であらう。

こ木の葉は夜よるの虹である、つきにしき月の錦の淵である。
こ此の峰、こ此の谷、か恁る思、あせ紅の梢を行く汽車さへ、とざろ轟きさへ、
おと音なき煙の、ゆき雪なす瀧をさかのぼつて、かる軽い群ぐんじやう青の雲に響く、

幽かすかなる、微妙びめうなる音楽おんがくであつた。

驛員えきゐんが黒く流くろれて、

「姨捨をばすて！姨捨をばすて！……」

一一

「失禮しつれい、此處こゝは一體いつたい何處どこなんですか。」

「姨捨をばすてです。」

五分間ふんかん停車ていしやと聞いて、昇降口しやうかうぐちを、峠たうげの棧橋かけはしのやうな、

雲くもに近いちか、夕月ゆふづきのしら／＼とあるプラットフォームおへ下りた

一人旅ひとりたびの旅客りよきやくが、恍惚うつとりとした顔かほをして訪ねた時とき、立會たちあは

せた驛員えきゐんは、……恚いかう答こたへた。が、大方おほかた睡ねむりから覺さめたものが、
 覺おぼつか束たなさに宿しゆくの名なに念ねんを入いれたものと思おもつたらう。

「姨をば捨すてです。」

「成なる程ほど。」

と胸むねに氣きを入いれたやうに領うなづいて云いつたが、汽き車しゃに搖ゆられて來きた
 聊いさゝかの疲つか勞れも交まじつて、山やまの美うつくしさに魅みせられて身みの萎なえ々と成なつ
 た、歎ため息いきのやうにも聞きえた。

實じつ際さい、彼かれは驛えき員ゐんの呼よび聲こゑに、疾とく此この停ステイ車シヨン場ンの名なは聞きい
 て心こゝろ得えたので。空そらも山やまも、餘あまりの色いろ彩どりに、我われは果はたして何いづこ處こに
 ありや、と自みづから疑たがつて尋たづねたのであつた。

「何なんとも申まをしやうがありません。實じつにいゝ景けし色きの處ところですな。」

出入りの旅客も僅に二三。で、車室から降りたのは自分
 ひとり一人だつた彼に、海抜二千尺の峰に於けるプラツトフォームは、
 恰も雲の上に拵へた白き瑪瑙の棧敷であるが如く思はれたから、
 驛員に對する挨拶も、客が歡迎する主人に對して、感
 謝の意を表するが如きものであつた。
 心は通ずる、驛員も、然も満足したらしい微笑を浮べて、
 「お氣に入りました結構です、もみぢを御見物でございます
 か。」

と半ば得意の髯を揉む。

「否、見物と申すと、大分贅澤なやうで。」
 と、彼は何故か懐中の見える、餘り工面のよくない謙遜の

仕方で、

「氣紛れに御厄介を掛けますのです。しかし、
一向に少いやうでございませぬ、此だけの處を。」

「はあ……」と一寸時計を見ながら、

「雑と十日ばかり後れて居ますです。最う雪ですから。風によつては今夜にも眞白に成りますものな。……尤も出盛りの旬だと云つても、月の頃ほどには來ないのでしてな。」

「あゝ、其の姨捨山と云ふのは孰れでございませぬ。」

「裏の此の山一體を然う云ふんださうです。」

と來合せて立停つた、色の白い少年の驛夫が引取る。
手届く其の山懷に、蔽ひかさなる錦葉の蔭に、葉の眞赤な

龍膽が、ふさくと二三輪、霜に紫を凝して咲く。……

途すがらも、此の神祕な幽玄な花は、尾花の根、林の中、山の裂けた巖角に、軽く藍に成つたり、重く青く成つたり、故と浅黄だつたり、色が動きつつある風情に、人に其の生命あることを知らせ顔に装つた。そして、下界に降りて、峰を、原を、紫の星が微行して幽に散歩する俤があつたのである。

「月見堂と云ひますのは。」

「彼處が其です。」と、少年の驛夫が指す。

其の錦の淵に、霧を被けて尾花が縁とる、緋の毛氈を敷いた築島のやうな山の端に、もの珍しく一叢の緑の樹立。眞黄ろ色な公孫樹が一本。篝火焚くか、と根が燃えて、眞紅の梢

が、ちらくゆふべあかねと夕の茜をほとばしらす。

道々みちくは、峰みねにも、溪たににも、然さうした處ところに野社のやしらの鳥居とりゐが見みえ
た。

こゝには、銀ぎんの月つき一輪いちりん。

三

「空そらの色いろが潭ふちのやうです、何なんと云いつたら可いいでせう。……碧あをとも

浅黄あさぎとも薄うすい納戸なんどとも、……」

月つきが山やま々くに曳ひいた其その薄衣うすぎぬを仰あふぐ時とき、雲くもの棧橋かけはしに立たつ思おも
ひがした。

再び見た時計を納めて、

「あれへ御一泊は如何です。」

目の下の崖の樹の間に、山鳥が吐いた蜃氣樓の如き白壁
造、屋根の石さへ群青の岩の斷片を葉に散らす。

唯見ると、驛員は莞爾として、機關車の方へ、悠然と
して霧を渡つた。

「や、出ますな。」

衝と列車に入つた時、驛夫の少年は車の尾へ駈けて通る。

笛は呶す、一鳥聲あり、汽車はするくと艶やかに動き出す。

窓で、彼が帽を脱ぐのに、驛員は舉手して一揖した。

霧が掠れて、ひたくと絡ひつく、霜かと思ふ冷さに、戸を引

いたが、彼は其の硝子に面をひたと着けたまゝ、身動きもしないで尚ほ見惚れた。

筑摩川は、あとに成り行く月見堂の山の端の蔭から、月が投げたる網かと思える……汽車の動くに連れて、山の峽、峰の谷戸が、田をかさね、畝をかさねて、小櫻、緋緘、萌黄匂、櫛を、青地、赤地、蜀紅なんど錦欄の直垂の上へ、草摺曳いて、さつくくと鎧ふが如く繰擴がつて、人の俤立ち昇る、遠近の夕煙は、紫籠めて裾濃に靡く。

水は金銀の縫目である。川中島さへ遙に思ふ。

「長野で辨當を買つた時に情なかつた。蓮に人參に臭い牛肉、肴と云ふのが生焼の鹽引の鮭は弱る。……稗澤山も

そくの、ほんぼち飯、あゝく旅行はしなければ可かつたと
思つた。

いや、贅澤は云ふまい、此の景色に對しては恐多いぞ。」

「伺ひます。」

一 停車場で、彼の隣に居た、黒地の質素な洋服を着て、

半外套を被つて、鳥打を被つた山林局の官吏とも思

ふ、瘦せた陰氣な男が、薄暗い窓から顔を出して、通がかりの

驛員を呼んで聞いた。

「伊那へは、此の驛から何里ですな。」

「六里半、峠越しで、七里でせう。」

「しますと、次の驛からだど如何なものでせう。」

「然やう……おいく。」

呼ぶと、驛員が駈けて來た。まだ宵ながら靴の音が高く響く。

……改札口に人珍しげに此方を透かした山家の小兒の乾

栗のやうな顔の寂しさ。

「……驛からだど伊那まで何里かね。」

「山路六里……彼は七里でございます。」

「はゝあ、」と歎息するやうに云つた時の、旅客の面色も

四邊の光景も陰々たるものであつた。

「俔はありませんか。」

「ございます。」

と驛夫が答へた。

「次の驛には、」

「多分ございませう、一臺ぐらゐは。」

「否、此處で下ります。」

と思沈んだのが、急に慌しげに云つて、

「此處で下ります。」

と、最う一度自ら確めるやうに言ひ加した。

驛員等は衝と兩方へ。

旅客は眉を壓する山又山に眉を蔽はれた状に、俯目に棚の

荷を探り取つたが、笛の鳴る時、角形の革鞆に洋傘を持添へ

ると、決然とした態度で、つかくと下りた。下り際に、顧み

て彼に會釋した。

健康を祈る。

四

となりゐる隣に居た其の旅客は、何處から乗合せたのか彼はそれさへ知らぬ。其の上、雙方とも、もの思ひに耽つて、一度も言葉は交さなかつたのである。

雖然、いざ、分れると成れば、各自が心寂しく、懐かしく、他人のやうには思はなかつたほど列車の中は人稀で、……稀と云ふより、殆ど誰も居ないのであつた。

彼は、單身山又山を分けて行く新しい知己の前途を思つた。

蜀道しよくだう 磽确かうかく として轉うたた世よは嶮けんなるかな。

孤驛こえき既に夜よるにして、里程りてい孰じつれよりするも峠たうげを隔へて七里しちりに餘あまる。

……彼は其その道だうちう中の錦葉もみぢを思おもつた、霧きりの深ふかさを思おもつた、霜しもの鋭すど

さを思おもつた、寧むしろ其それよりも早はや雪ゆきを思おもつた、……外ぐわいたう套くろ黒くろく沈しづ

んで行ゆく。……

月つきが晃きら々と窓まどを射いたので、憂然からりと玉たまの函はこを開ひらいたやうに、山や

々まく谷たに々／＼の錦葉もみぢの錦にしきは、照てら々と輝かを帯おびて颯さつと目めの前に又また

卷まき絹ぎぬを解とき擴ひろげた。が、末すゑは仄ほの々／＼と薄うすく成なり行ゆく。渚なぎさの月つき

に、美うつくしき貝かひを敷しいて、ああの、すすららくと細ほそく立たつ煙けむりの、恰あたも鷗おめ

の白しろき影かげを岬みさきに曳ひくが如ごとく思おもはれたのは、記き憶おくが返かつたのである。

汽車きしやは山やまの狭間はざまの左さ右うに迫せまる、暗くらき斷崖だんがいを穿うがつて過すぎるので

あつた。

窓なる峰に、星を貫く、高き火の見の階子を見た。

孤家の灯の影とても、落ちた木の葉の、幻に一葉紅の俤に立

つばかりの明さへ無い。

岩を削つて点滴る水は、其の火の見階子に、垂々と雫して、

立ちながら氷柱に成らむ、と冷かさの身に染むのみ。何處に家を

焼く炎があらう。

曉の霜を裂き、夕暮の霧を分けて、山姫が撞木を當てて、

もみぢの紅を里に響かす、樹々の錦の知らせ、と見れば、龍膽

に似て俯向けに咲いた、半鐘の銅は、月に紫の影を照らす。

大なる蝙蝠のやうに、煙がむらくと隙間を潜つた。

「あゝ、トンネル 隧道へ入つた。」

ひと 人も知つた……此この 隧道トンネル は以てのほかに 外鎖がある。普通我ふつうわがくにたい 國第こくだい
とな 一と稱へて、てんこうにかはる (代天工) と銘打つたと聞きく、かふしうさご 甲州笹子の
トンネル 隧道より、寧むしろ此この 方が長はうながいかも知れぬ。

はじめは、たゞあまりに通過とほりすぎるつもりで、事こととも爲ななかつ

たばかりで無ない。一いつかう 向、此この 變則へんそく の名所めいしよ に就ついて、知ち識しきも

經けいけん 験も無なかつた彼かれは、次第しだいに暗くらく成なり、愈いよく々ふか深ふかくなり、もの

凄すさまじく成なつて、搖ゆすぶれく轟ぐわうぜん然ぜんたる大音響だいいんきやうを發はつして、汽車きしや

は天窓あたまから、鈍にぶき錐きりと變へんじて、山やまの底そこに潜もぐりこ込こむが如ごとき、易やすから

ぬものの氣勢けはひに、少すくなからず驚おどろかさされたのである。

「此これは難なん所しよだ。」

美人に見惚るゝとて、あらう事か、ぐつたり鏡臺に凭
 掛つたと云ふ他愛なき。で、腰掛に上り込んで、月の硝子
 窓に、骨を抜いて凍付いて居たのが、慌てて、向直つて、爪
 探りに下駄を拾つて、外套の下で、ずるりと弛んだ帯を緊
 めると、襟を引掻合せる時、袂へ這つて宙に留まつた、大切
 な路銀を、ト懐中へ御直り候へと据直して、前褌をぐい、
 と緊めた。

「いや、なかくだぞ、尚だ。……」

汽車は轟々と、唯瀧に捲かれた如くに響く。
 此處で整然として腰を掛けて、外套の袖を合せて、一つ下
 腹で落着いた氣が、だらしもなく續けざまに噎せ返つた。

けむりはげ
煙が烈しい。

五

室しつ内ない一いち面めん濛もう々々ととした上うへ、あくどい黄味きみを帯おびたのが、
生なま暖ぬるい瀬せをつつくて、むくく泡あわを吹ふくやうに、……獅しかみづら噛か面めんで
切く齒ひしつた窓まど々々の、隙すき間まと云いふ隙すき間ま、天てん井じ、廂ひあはひ合あから流な
がれこ
込こむ。

噂うはさも知しらなかつた隧トンネル道これが此これだとすると、音おとに響ひびいた笹ささ子は可お
恐そしい。一層いつそ中なか仙道せんだうを中央線ちうあうせんで、名古屋なごやへ大おほりまはりをしよう
かと思おもつたくらゐる。

「何なんにしろ酷ひどいぞ、此これは……毒どくを以もつて毒どくを制せいすと遣やれ。」
 で、袂たもとから卷まきたたばこ 莨ぼこを取とつて、燐寸マツチを摺すつた。口くちの先さきに※と燃も
 えた火ひで勢いきほひづ付ひづいて、故わざと煙けむりを深ふかく吸すつて、石炭せきたん臭くさいのを浚さら
 つて吹出ふきだす。

め 目めもやゝ爽さわやかに成なつて、吻ほつと呼吸いきをした時とき——ふと、否いや、はじ
 めてと言いはう、——彼かれが掛かけた斜はすに、向むかう側がはの腰掛こしかけに、疊たゝまり
 積つもる霧きりの中なかに、落おちて落おちかさなつた美うつくしい影かげを見みた。
 影かげではない、色いろある衣きぬの媚なまめかしいのを見みたのである。

「女をんなが居ゐる。」

然しかも二人ふたり、……

と認みとめたが、菱なえ々くとして、兩りやう方ほうが左さい右いうから、一ひとり人は一いつぱ

方うの膝ひざの上うへへ、一人ひとりは一方いつぽうの、おくれ毛げも亂みだれた肩かたへ、袖そでで面おもてをひたと蔽おほうたまゝ、寄より縫すがり抱いだ合きあふやうに、俯うつぶ伏ふしに成なつて惱なやましげである。

姿すがたを、然さうして撓たをやかに折をり重かさねた、袖そでの色いろは、濃こい萌もえ黄ぎである。深ふかい紫むらさきである。いづれも上うへに被きた羽は織おりとは知しれたが、縞しま目はわか分わからぬ。言いふまでもなく紋もんがあらう。然しかし、煙けむりに包つまれて、朦もうろ朧うとしてそれは見みえぬ。

小袖こそでも判はつきり然させぬ。が、二人ふたりとも紋もん縮ちり緬めんと云いふのであらう、絞しぼつた、染にじんだやうな斑むら點ちのある緋ひの長なが襦じゆ袢ばんを着きたのは確たしかで、搦からみ合あつた四よつの袖そでから、萌もえ黄ぎと其その紫むらさきとが彩いろを分わけて、八やツつにはらみだくと亂みだれながら、しつとりと縫もつれ合あつて、棲つ紅れなみに亂みだれし姿すがた。

……

其その然しかも紅くれなゐは、俯うつむ向むいた襟えりをすべにり、凭もたれかゝつた衣えもん紋もんに崩くづれて、
 膚はだも透すく、とちらめくばかり、氣け勢はひは沈しづんだが燃も立えたつやう。

ト其その胸むねを、萌も黄えぎに溢こぼれ、紫むらさきに垂きたれて、伊だ達て卷まきであらう、一人ひとり
 は、鬱うこん金のひとり、一人ひとりは朱とき鷲いろ色のむす、だらり結むすびが、ずらりと摩なびく。

「おやく／＼女郎ぢよらうかな。」

雖けれど然も、襦じゆ袢ばんばかりに羽は織おりを掛かけて旅たびをすべき所いは説はない。

…… 駈かけ落おちと思おもふ、が、頭づきん巾かぶも被かぶらぬ。

…… 顔かほを入いれ違ちがひに、肩かたに前まへ髪がみを伏ふせた方はうは、此こち方らむ向むきに、やゝ
 俯うつむ向むくやうに紫むらさきの袖そでで蔽おほふ、がつくりとしたれば、陰かげに成なつて、
 髪かみの形かたちは認みめられず。

其の、膝に萌黄の袖を折掛けて、突俯した方は、絞か鹿の子か、ふつくりと緋手柄を掛けた、もつれ毛はふさくと揺れつつも、煙を分けた鬢の艶、結綿に結つて居た。

此女が上に坐つて、紫の女が、斜めになよくと腰を掛けた。落した裳も、屈めた褌も、痛々しいまで亂れたのである。年紀のころは云ふまでもない、上に襲ねた衣ばかりで、手足も同じ白さと見るまで、寸分違はぬ脊丈恰好。

……と云ふ、其の脊丈恰好が?……

六

「見世ものに成る女ぢやないか。」

一度、然う思つたほど小さかつた。

が、いぢけたのでも縮んだのでもない。吹込む煙に惱亂した風情ながら、何處か水々として伸びやかに見える。襟許、肩附、褙はづれも尋常で、見好げに釣合ふ。小さいと云ふより、……小造りに過ぎるのであつた。

汽車は倒に落ちて留まない。煙が濃いのが岩を崩して、泥を掻きく、波のやうな土を煽つて、七轉八倒あがき悶ゆる。

俗に、隧道の最も長いのも、ゆつくり吸つて敷島一本の間と聞く。

二本目を吸ひつけた時、彼は不安の念を禁じ得ないのであつた。

……不思議な伴侶である。姿に色を凝らした、朦朧とした女の抱合つた影は、汽車に事變のあるべき前兆ではないのであらうか。

嘗て此の隧道を穿ちし時、工夫が鶴背、爆裂彈の殘
 虐に掛つた、弱き棲主たちの幻ならずや。

或は此の室にのみ、場所と機會に因つて形を顯す、世に亡き
 人の怨靈ならずや。

と、誘はれた彼も、ぐらぐらと地震ふる墓の中に、一所に住
 んで居るものやうな思ひがして、をかしいばかり不安でならぬ。
 靜坐するに堪へなく成つて、急に衝と立つと、頭がふらふらと
 してドンと尻もちをついて、一人で苦笑した。

ふと大風おほかぜが留やんだやうに響ひびきが留やんで、汽車きしやの音おとは舊もとに復かへつた。彼は慌かれあわたしく窓まどを開ひらいて、呼吸いきのありたけを口くちから吐はき出すが如ごとくつきに月あふを仰あふぐ、と澄すみ切きつた山やまの腰こしに、一ひと幅はのむら尾花おぼなを殘のこして、
室むろ内の煙けむりが透すく。それが岩いはに浸しみ込んで次第しだいに消きえる。

夢ゆめから覺さめた思おもひで、厚あつぼつたかつた顔かほを撫なでた、其その掌てを膝ひざに支ついて、氣きも判はつ然きりと向む直きなほつた時とき、彼かれは今いままでの想さう像ざうの餘あまりな癡たはけまなさに又また獨ひとりで笑わらつた。

いや、知己ちかづきでもない女をんなの前まへで、獨ひとり笑わらは梟ふくろの業わざであらう。
冥界めいがいの伴みちづれ侶れか、墓はかの相借あひじやく家やか、とまで怪あやしんだ二人ふたりの女をんなが、別條べつてうなく、然しかも、揃そろつて美うつくしい顔かほをあげあり居ゐたから。

「矢張やつぱり隧トンネル道なやに惱なやんだんだ。」

と彼は頷いたのであつた。

「そして、踊……踊の歸途……恚う着崩した處を見ては、往路で

はあるまい。踊子だらう。後の宿あたりに何か催しがあつて、

其處へ呼ばれた、なにがし町の選ぬきとでも言ふのが、一つ先か、

それとも次の驛へ歸るのであらう。……踊の催しと言へば、園

遊會かなんぞで、灰色の手、黄色い手、樺色の手の、鼬、

狐、狸、中には熊のやうなものも交つた大勢の手に、引、され、

掴立てられ、袖も振も亂れたまゝを汽車に乗つた落人らしい

。落人と云へば、踊つた番組も何か然うした類かも知れぬ。

……其の紫の方は、草束ねの島田とも見えるが、房りした男

……

鬢まげに結ゆつて居ゐたから。

このほう
此方ここのほうは、やゝ細ほそ面おもてで。結綿ゆひわたの娘むすめは、ふつくりして居ゐる。

ふたり
二人ふたりとも鬢かつらを被かぶつたかと思おもふ。年とし紀わかが少わかい、十三四とか、それとも

五六め、七八じりか、眦べにに紅いを入いれたらしいまで極ごく彩さい色しきに化け粧しやうした

が、烈はげしく疲つかれたと見みえて、恍うつ惚とりとして頬ほに蒼あを味みがさして、透す

きとほ
通とほるほど色いろが白しろい。其その紅べにと思おもふ瞼まぶたの紅ながなかつたら、小柄こがらで

はあるし、たゞ動うごく人にんぎやう形かたちに過すぎまい。

七

「何なにしろ弱よわつたらしい。……舞臺ぶたいの歸途かへりとして、今いまの隧トンネル道みちを

越すのは、芝居の奈落を潜るやうなものだ、いや、眞個の奈落
 だつた。」

—— 心 細いよ木曾路の旅は

笠に木の葉が舞ひかゝる——

人形にんぎやうのやうな此この女をんなたち達、聲こゑを聞きたい、錦葉もみぢに歌うたふ色いろどりで
 鳥とりであらう。

まだ全く消え果てない煙けむりを便宜よすがに、あからめもしないで熟ちつと視み
 る時とき、女をんなは二人ふたり、揃そろつて、目めを睜みはつて、四ツよつの目めをぱつちりと瞬また
 きした。……瞳ひとみは水晶すゐしやうを張はつたやうで、薄うすけむり煙しつの室とほを透とほ
 て透すき通とほるばかり、月つきも射さ添しそふ、と思おもふと、紫むらさきも、萌黄もえぎも、袖そでの
 いろいろぱつぱつと冴さえて、姿すがたの其處そこ此處こゝ、燃立もえたつ緋ひは、炎ほのほの亂みだるゝやうで

あつた。

すつかと立揚たちあがつた大漢子おほをのこがある。

さき

先に——七里半りはんの峠たうげを越こさうとして下りた——見いつけんの知己ちいきが居あた、

いすあひだむか

へだ

かれ

おなかは

ひとすみ

隅すみに、

薄うすあを青あをい天鵝びろ

椅子いすの間あひだを向むかうへ隔へだてて、

うどよりかゝりまくら

トネル

こ

いぜん

よる

そこ

しづ

絨じゆうの凭掛へいかけを枕まくらにして、

うに、煙けむりに陰いん々くとして

よこだふ

寝ねて居あたのが、

此この時とき仁王立にわうだ

ち

な

成なつたのである。

が、唐突だしぬけに大おほな材木ざいもくが化ばけて突立つゝたつて、

手足てあしの枝えだが生はえた

か

と疑うたがはるゝ。

茶ちやの鳥打とりうちを

ずぼりと深ふかく、

身みの丈たけを上うへから押おし込んだ

體ていに被かつ

た

たのでさへ、見上みあげるばかり脊せが

高たかい。

茶羅紗ちやらしや霜降しもふりの

大外おほぐわ

た

た

た

た

いたう
 套を、風に向つた蓑よりも擴く裾一杯に着て、赤革の靴を
 穿いた。

時に斜違ひにづかりと通つて、二人の女の前へ會釋もなく
 ぬつくと立つ。ト紫の目が、ト其の外套の脇の下で、俯目に
 成つたは氣の毒らしい。——紅は萎む、萌黄の八ツ口。

大漢子の兩手は、伸をして、天井を突抜く如く空さま
 に柵に掛る、と眞先に取つたのは、彈丸帶で、外套の腰へ
 ぎしりとゞ《し》め、續いて銃を下ろして、ト箬高にがツしと
 かけた。大な獲もの袋と、小革鞆と一所に、片手掴みに引
 下したのは革紐の魔法纏。

で、一揺り肩を揺つて、無雜作に、左右へ遣違へに、ざく

りと投掛ける、と腰でだぶりと動く。

獲もの袋が重さうに、然も發奮んで搖れた。

——山鳩七羽、田嶋十三、鶉十五羽、鴨が三羽——

づしりと其の中にあるが如くに見て取られる。……

昨日、碓氷で汽車を下りて、峠の権現様に詣でた時、さしかか

りで俵を下りて、あとを案内に立つた車夫に、寂しい上坂

で彼は訊ねた。

「些とも小鳥が居ないやうだな。」

「捜すと居ります。……昨日も鐵砲打の旦那に、私がへい、お

供で、御案内でへい、立派に打たせましたので。」

と狡しげな目を光らして云つた。鳴も鳩も、——此處に其の獲

ものの數さへ思つたのは、車夫が其の時の言葉の記憶である。

此の山里を、汽車の中で、殆ど鳥の聲を聞かなかつた彼は、何故か、谷筋にあらゆる小禽の類が、此の巨な手の獵人のために狩盡されるやうな思ひして、何となく悚然とした。其も瞬時で。

汽車は留まつた。

「鹽尻、鹽尻——中央線は乗換。」

其の途端である。……鷹揚に、然も手馴れて、迅速に結東し果てた紳士は、其の爲に空しく待構へて居たらしい兩手にづかりと左右、其の二人の女の、頸上と思ふあたりを無手と掴んで引立てる、と、呀？ 衣も扱帯も上へ摺つて、するりと

しろ^{かほ}顔^{えり}が襟^{うま}に埋^むつた、紫^{むらさき}と萌^も黄^{えぎ}の、緋^ひを流^{なが}るゝやうに宙^{ちゆう}に掛^かけて、
 紳^{しん}士^しは大^{おほ}跨^{また}にづかりく。
 呆^{あつ}氣^けに取^とられた彼^{かれ}を一人^{ひとり}室内^{しつない}に残^{のこ}して、悠^い然^{うぜん}と扉^{とびら}を出^でたの
 である。

あとの、もの凄^{すご}さ。

八

紅^{べに}さいた二^{ふた}ツの愛^{あい}々^{くちびる}しい唇^{くちびる}が、凍^いてて櫻^{さくら}貝^{がひ}の散^ちつて音^{おと}す
 るばかり、月^{つき}にちらくと、それ、彼^{あすこ}處^こに此^こ處^こに――

「あゝ、寒^{さむ}い。」

温泉をんせんに行かうとして、菊屋きくやの廣袖びとてらに着換きかへるに附つけても、途中ちゆうどうぶるの胴震どうぶるひの留とまらなかつたまで、彼かれは少すくなからず怯おびやかされたのである。

東京とうきやうを出程たつ時ときから、諏訪すはに一泊ぱくと豫定よていして、旅籠屋はたごやうろぎは志した町まちどほ通りの其その菊屋きくやであつた。

心こころ細ほそい事ことには、鹽尻しほじりでも、一人ひとりも同じ室おなじへ乗込のりこまなかつた。……其その宿しゆくの名なは、八重垣やへがき姫ひめと、隨筆ずゐひつの名なで、餘所よそながら、未見みけんの知己ちいき。初對面しよたいめんの從姉妹いとこと、伯父おぢさんぐらゐに思おもつて居ゐたのに。……

下諏訪しもすはへ來くると、七八人にん、田螺たにしを好すきさうな、然しかも娑婆氣しやばつけな商人風あきんどふうの身みを光ひからして、ばら〜と入はひつて來きた。其その中なかで一ひ

人、あの、其その女をんな二人居ゐた處ところへ、澄すまして腰こしを掛かけた男をとこがあつた。
 はつと思おもつたが、一いつ向かう平氣へいきで、甲府かふふか飯田町いひだまちへ乗越のりこすらし
 い。上諏訪かみすはに彼かれが下車げしやした時ときまで、別べつに何事なにごともなく、草くさにも樹き
 にも成ならず、酒さけのみと見みえて、鼻はなの尖さきの赤あかいのが、其そのまゝ柿かきの
 實みにも成ならないのを寧むしろ怪あやしむ。

はじめ、もう其そのあたりから、山やまも野のも眇べうとして諏訪すはの湖みづうみの水みづ
 と成なる由よし、聞きいては居ゐたが、ふと心こゝろ着づかずすに過すぎた、——氣きに
 して、女をんなの後あとばかり視ながめて居ゐたので。

改札口かいさつぐちを冷つめたく出でると、四邊あたりは山やまの陰かげに、澄すみ渡わたつた湖みづうみを包つん
 で、月つきに照てり返かへさるゝ爲ためか、漆うるしの如ごとく艶つややかに、黒くろく、且かつ玲れいろ
 瓏うとして透すき通とほる。

しろ
白きは町家の屋根であつた。

みづ
水から湧いた影のやうに、すらくと黒く燻つて、俣が三臺、

め
ついで目の前から駈出した。

くるま
——俣が三臺、人が三人——

「待てよ、先刻の紳士は、あゝして、鹽尻で下車たと思ふが、

……其とも室を替へて此處まで來たか、俣が三臺、揃つて。」

と見る、目の前へ、黄色い提灯の灯が流れて、がたりと青

く塗つた函車を曳出すものあり。提灯には赤い蓋で、車

には白い紋で、菊屋の店に相違ない。

「一寸、菊屋の迎かい。」

「然うで。」

とぶつきら棒立。仲屋の小僧と云ふ身の、から脛の、のツぽが答へる。

「おい、其處へ行くんだ、俵はないかね。」

「今ので出拂つたで、」

「出拂つた……然うか。……餘程あるかい。」

「何、ぢき其處だよ。旦那、毛布預ろかい。」

縞の膝掛を函に載せて、

「荷もつも寄越すが可いよ。」

「追剥のやうだな。」

と思はず笑つたが、これは分らなかつた。奴はけろりとして、

冷いか、日和下駄をかたくと高足に踏鳴らす。

「おい来た。」

と出さうとした信玄袋は、顧みるに餘りに軽い。函に載せると、ポンと飛出しさうであるから遠慮した。

「これは可いよ。」

「然うかね、では、早く來さつせいよ。寒いから。」

ありや、と威勢よく頭突に屈んで、鼻息をふツと吹き、一散に黒く成つてがらくと月夜を駈出す。……

猪が飛出したやうに又驚いて、彼は廣い辻に一人立つて、店々の電燈の數より多い、大屋根の石の蒼白い數を見た。

紙張の立看板に、（浮世の波。）新派劇とあるのを見た。

其の浮世の波に、流れ寄つた枯枝であらう。非ず、湖の冬を彩る、

くれなるふたはみは
紅の二葉三葉。

九

「酒を頼むよ、何しろ、……熱くして。」

菊屋に着いて、一室に通されると、まだ坐りもしない前、外
套を脱ぎながら、案内の女中に注文したのは、此の男が、
素人了簡の回生劑であつた。

其のまゝ、六疊の真中の卓子臺の前に、と坐ると、早や
目前にちらつく、濃き薄き、染色の葉に酔へるが如く、額を壓
へて、ぐつたりと成つて、二度目に火鉢を持つて來たのを、誰と

も知らず、はじめから其處に火を装つて備附けられたものやうに、無意識に煙草を吸つた。

ほそけむりみねなび
細い煙も峰に靡く。

「お召しかへなさいまして、お湯へ入らつしやいまし。」
「然うだ、飛込まう。」

と糊の新しい浴衣に着換へて——件の洞震ひをしながら——廊下へ出た。が、するくと向うへ、帳場の方へ、遙に駈けて行く女中を見ながら、彼は欄干に立つて猶豫つたのである。

湯氣が温く、目の下なる湯殿の窓明に、錦葉を映すが如く色づいて、むくりと此の二階の軒を掠めて、中庭の池らしい、さらくと鳴る水の音に揺れかゝるから、内湯の在所は聞かない

でも分る。^{わか}

が、通^{とほ}された部屋は、すぐ突^{つき}當^{あた}りが壁^{かべ}で、其處^{そこ}から下^おりる裏^{うら}階^{らばしご}子の口^{くち}は見^みえない。で、湯殿^{ゆどの}へは大^{おほまは}りしない^ゆと行^ゆかれぬ^{ところ}處^{ところ}で、はじめ女中^{ぢよちゆう}に案内^{あんない}されて通^{とほ}つた時^{とき}から、

「此處^{こゝ}では酔^よへないぞ。」と心^{こゝろ}で叫^{さけ}んだ、此^この高^{たか}いのに、別^{べつ}に階^は子^{しごだん}壇^{だん}と云^いふほどのものも無^なし、廊下^{らうか}を一^{ひとまは}りして、向^{むか}うへ下^おりるあたりが、可^かなりな勾^{こう}配^{ばい}。低^{ひく}い太鼓橋^{たいこばし}を渡^{わた}るくらゐ、拭^ふ込んだ板^{いた}敷^{じき}が然^{しか}もつるりと迂^{すべ}る。

彼^{かれ}は木曾^{きそ}の棧橋^{かけはし}を、旅店^{りよてん}の、部屋^{へや}々々^{／＼}の障子^{しやうじ}、歩^{あゆ}みいた^{いた}の壁^{かべ}に添^そつて渡^{わた}つて來^きた……其^{それ}も風情^{ふぜい}である。

雖^{けれど}然^も、心^{こゝろ}覺^{おぼ}えで足許^{あしもと}の覺^{おぼ}束^{つか}なさに、寒^{さむ}ければとて、

三 尺を前結びに唯解くばかりにしたればとて、ばたく駈出すなんど思ひも寄らない。

且つは暗い。……前途下りに、見込んで、其の勾配の最も著

しい其處から、母屋の正面の低い縁側に成る壁に、薄明

りの掛行燈が有るばかり。他は、自分のと一間置いて高樓の

一方の、隅の部屋に客がある、其處の障子に電燈の影さす

のみ。

「此は、そろりくと參らう。」

獨りで苦笑ひして、迫上つた橋掛りを練るやうに、谿川

に臨むが如く、池の周圍を欄干づたひ。

他の客の前をなぞへに折曲つて、だらく下りの廊下へ掛る

と、舊來た釣橋の下に、磨硝子の湯殿が底のやうに見えて、
 而して、足許が急に暗く成つた。

ト何處へ響いて、何に通ふか、辿々しく一步二歩移すに
 連れて、キリ／＼キリ／＼と微に廊下の板が鳴る。

ちよろ／＼とだけの流ながら、堤防も控へず地續きに、諏訪湖
 を一つ控へたれば、爪下へ大湖の水、鎬をせめて、矢をはいで、
 じり／＼と迫るが如く思はるゝ。……其の音さへ、途留むか、と
 耳に響いて、キリ／＼と細く透る。……

奥山家の一軒家に、たをやかな女が居て、白雪の絲を谷
 に繰り引く絲車の音かと思ふ。……床しく、懐しく、美しく、
 心細く、且つ凄い。

ト又聞える。

(きりく、きりく)

きいこ、きいこ。) ……

十

かれ ひきす
彼は引据ゑられるやうに立つた。

むかし ほんちん
古の本陣と云ふ構への大きな建ものは、
ひっそり
寂然として居る。

きやく ほか
客は他にない。

ゆ いるす
湯に行つた留守か、もの越、
けはひ
氣勢もしないが、
ステイション
停車場から俤
はし
で走らした三人の客、
にん きやく
其の三人が其處に、
おも
と思つて、
ふか
深く注意し

た、——今は背後いま うしろに成なつた——取と着ツきの電でん燈とうを裡うちに閉し切めつた、障しやう子じの前まへへ、……翼つばを搔か込こんだ、地ちを渡わたる鳥とりの影かげが黒くろく映うつつた。

小形こがたな鳩はとほどある、……

唯とみ見ると、するくくと動うごく。障しやう子じはづれに消きえたと思おもふと、

きりくくと板いたに鳴なつて、つるくくと這すべつて、はつと思おもふ袂たもとの下したを、

悚然ぞつと胸むねを冷つめうさして通とほ抜りぬけた。が、颯さつと、翠みどりに、藍あゐを襲かね、

群ぐん青じやうを籠こめて、紫むらに成さつて、つい、其その掛行燈かけあんどんの前まへを抜ぬけ

た。

が、眞赤まつかな嘴くち口くちを明あけた。

萌黄もえぎ色の首いろがするくくと伸のびて、車くるまが軋まきし

(きりく、きりく)

きいこ、きつこ、きいこ。……

(樹へ行こ、樹へ行こ。)

樹樵來るな、樹樵來るな。きいこ、きいこ

と鳴いた。

あゝ、あの、手遊びの青首の鴨だ、と見ると、續いて、追ひ
 状に袖の下を抜けたのは、緋に黄色に、艶々とした鴛鴦であ
 る。

ともに、勾配にすらくくと、水に流るゝ、……廊下を迂る。

「何處かへ糸を引掛けた。」

廣袖へ着けて女中が、と、はたくと袖を煽つたが、フト鳥

に成るやうに思つて、暗がりくらで悚然ぞつとした。

第一だいいち、身みに着ついた絲いとの、玩弄具おもちゃの鳥とりが、イんだものを、向むかうへ通とほりぬ抜すうける數かずはない。

手てを緊しめて、差さしうかゞ 窺おもやふ、母屋おもやの、遠とほく幽かすかなやうな帳場ちやうばから、

明あかりの末すゑが茫ぼうと届とゞく。池いけに面めんした大廣間おほひろま、中なかは四五十疊でふと思おもはる

ゝ、薄うすぐら 暗しやうじい障子かざの數まんなかの眞中あはあたり。合あはせ目めを細目ほそめに開あけて、

其處そこに立たつて、背うしろ後に、月つきの影かげさへ届とゞかぬ、山やま又また山やまの谷たに々々／＼を、

蜘蛛くもの圍いの如ごとく控ひかへた、星ほしに届とゞく黒くろき洞ほら穴あなの如ごとき大おほいなる暗くら闇が

を翼つばさに擴ひろげて、姿すがたは細ほそき障子しやうじの立たち棧ざん。

温泉いでのの煙けむりに、ほんのりと、雪ゆきなす顔かんばせせくろかみまげ、黒くろ髪かみの鬚まげ。

幻まぼろしの裳もすそに月影つきかげさすよと、爪つまさき先しろ白しろく立たつたのが、花はなの魂たまのや

うな^て手を^あ上げて、ちらりと^{まね}招く。

きりくくと、鳥^{とり}の形^{かたち}は柱^{ちはしら}を^{めぐ}繞つた。

其^その女^{をんな}は——

——此^{これ}に就^ついて、別^{べつ}に物^{もの}語^{がたり}があるのである。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷十五」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日第1刷発行

1987（昭和62）年11月2日第3刷発行

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年9月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

魔法罫

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>